

佳作

自分らしく生きるおじいちゃん

茨城県 日立市立櫛形小学校五年 渡辺 悠月

今年の夏、私の祖父は癌になり手術を受けた。左上顎を失う大きな手術だった。お見舞いの帰り、母と書店に寄った。ふと帯に引かれ手に取った本は病氣と向き合うおじいちゃんの話で、私は祖父の事があり気になった。

私の祖母は、厳父慈母だ。祖父は昔ながらの頑固者で厳しい人だった。しかし、私にとって祖父はちょっと違う印象だ。「人に迷惑をかけるな」が口癖で厳しい一面もあるが、私には甘かった。

祖父はトラックの運転手で七十三歳の今も仕事を続ける働き者だ。週末には母と祖母の家によく行くが祖父は仕事で居ない事が多い。留守中母達は「お父さんが居ると口煩いから元気に働いているのが一番」と女ばかりで盛り上がる。祖父は夕方帰ってくる。ニコニコしながら私を見付けると「良く来

た」と目を細めいつもポケットから五百円玉を出しお菓子を買えと一枚くれる。母達は口を揃えて「甘いねお父さんはいつも悠月ばかり」と言う。祖父の溺愛ぶりは家族全員が認めている。私は特別なんだと嬉しくなる。もちろん私も祖父が大好きだ。

祖父の様子が変わったのは六月頃だった。新しい仕事を引き受けたと張り切っていたが歯が痛むと歯科に行くため仕事を休んでいた。祖父は、職場に迷惑をかけると悔やんでいた。

しばらくして祖父に癌が見付かった。病気が分かってからも祖父は仕事を続けていた。

医師の説明を聞き母達は連日話し合っていた。祖父は「年だし苦しむのは」と言ったが、母は「手術しかない」と言い切った。それでも祖父が居ないと「頑張って手術をしても生涯不自由だったら辛いだろう」と母達は悩んだ。その話を聞きながら私もみずほと同じ感情を抱いていた。

祖父は入院中私達と連絡を取るため苦手だったメールを覚えた。送られて来るメールは間違えが多かったが、いつも私を心配する内容だった。七月下旬、祖父が退院した。その週末私は祖父に会いに行った。入院前に比べ痩せていて話す様子も不自由そうだった。

た。不安に思ったが祖父は私を見てポケットから五百円玉を出した。いつもの祖父だった。

手術から一ヶ月が経つ頃、長い事迷惑をかけたと頼まれた仕事を引き受けた。祖父は、日常を取り戻した。

本を読み始めた頃私は、残された時間をどう過ごすか、自分らしく生きるには、何か特別な事のように思っていたがそれは少し違って大切なのは日常なのだ気づいた。

今世界ではコロナが蔓延し戦争が起きている国もある中、日常は特別な時間なのだ。命を紡ぐとは、家族皆が祖父を心配した。入院中祖父は私を心配し何度もメールを交換した。家族はこうして互いを支え繋がっている。私達は日常を共にする事で家族一人一人の心の中に記憶され刻まれるのだと思います。